**ハムレット**

幕末を数年後に控えた開港地横浜で

エゲレス人の演じた

日本語による「ハムレット」の第三幕第一場の

主人公ハムレットのせりふ。

原文はローマ字から和字へ

　旧漢字は現行漢字に変換

　　　　　　　日本での機械翻訳のハシリ！

あります　ありません　あれは　何　ですか

もし　もっと　大丈夫　頭　中　痛い　あります

縄　物と　は　一番　悪い　沢山　一番ある

腕　とります　向ふ　面倒　事　海

そして　bobbery致します

お仕舞？　死んだんじ　寝る

まだ　それから　寝る　で　話　も　宜し

心痛い　と　一千　毎日　ポンコツ

うし　おとっつぁん　あります

それ　は　出来ました　もの

沢山　しました　死んだんじ　寝る

寝る　大方　贋　拝見　左様　あちら

少し　セランパン　から　あの　死んだんじ

の　寝る　なに　贋　拝見　出来ます

この　長い　死んだんじ　piggy　しました

少し　又進上

あなた　さよなら　そして　手　ポンパン

演目は

「ハムレットさん　デンマークの守」

イギリス人のCharles Wirgmanが紹介した

芝居小屋風景で、

「Hamuretu san Denmarku no Kami」

とある。

「死んだんじ」：意味不明、診断時？

「ポンコツ」「セランパン」は当時の横浜俗語で

　　ポンコツはゲンコ

　　セランパンはほったらかし

出典：「明治翻訳異聞」秋山勇造　新読書社

この著作者の記述を信用するとして

理解できるのは　最初の行と最後の行のみで

しかも　この日本語のセリフを暗記するのは

当時でも今でも　日本人には不可能。

文字化すれば　訳の分からぬ日本語であるが

しかし　演者が**卓越した**

それなりの技術と工夫で発声すれば

それなりの効果もあったのであろう。

開化進行中の当時の日本人の多くは　今日と同様に

**「異物は聖物なり」**で　吸い寄せられた。

人間の動物的本能には「訳が分からぬ」ものには

思考より優位の魅力と吸引力がある。

幼子が「なぜ？」と連発するのも

「訳が分からない」から。

異文化との接点で　見逃せないポイントでもある。

今でもこのような珍訳が　大手を振ってまかり通る

一例として　敢えて踏み込めば

文字化された「宗教」。

宗教の定義は横に置いて進めると

「それらしきものも　らしくないもの」を

「宗教」と言う日本語で**簡単に**括るが

異文化圏で**も日本でも**　宗教ではないものが多々あり。

冷静に距離を置いて観察すれば

主義・主張・信念・思想・勇気付け・誓い・思い込み

の類であることが多い。

場合により　行き着くところが「振込詐欺」と

「何とか商法」でもある。

例えば　儒教は宗教か否か?

時代にもよるが　明確な解答はない。

報道記者が　異国風景で報ずる

彼らが礼拝し　首を垂れる光景を目にすると

例外なく　「敬虔な祈り」と一様に表現するが

憎悪を込めて復讐を誓っている場合も多い。

繰り返すが　宗教の定義は横に置く。

宗教・宗派・党派・主義・主張等々は

**関係者同士の**合意の上に成り立つ作り話で

それ以外の何ものでもない　という見方も成り立つ。

そこでは

集まり　集められ　クラスターを形成し　宗派となり

他のクラスターを攻撃すれば　ウイルスへと変貌し

世界史は　これらウイルスで満載であった。

今の感染症大流行の状況をも

このことを踏まえ　それなりに認識すれば

全世界に厳しくも　等しく教示している

歴史的瞬間であり　今を生息する我々にとっては

その事実を再確認し覚醒すべき　願ってもない

**歴史的瞬間**でもある。

さて　ハムレットのセリフの

To be, or not to be: that is the question

は受験生が遭遇させられる句であり

大方は　これにて以後

ハムレットとの関わり合いはなくなる。

該当するセリフの原文には

bobberyもpiggyも見当たらず

ハムレット全文を当たっても　両単語はない。

**ここで**推定できることは　この悲劇には　初演以来

観客に合わせた台本が　ピンからキリまであり

キリ物が極東の新開地横浜で

キリ者により演じられたのであろう。

さらに踏み込めば　現存する台本の間でも

句読点のコロンやセミコロンが　自由に採用され

文法上では　かなり支離滅裂さが見られる。

彼のセリフの冒頭（相違部のフォント朱拡大）

To be, or not to be: that is the question: と

To be, or not to be, that is the question:

と2種類あり　訳者により様々に文章化され

学生や一般向けには
「生きるか死ぬか、それが問題だ」とある。

当てにならぬ私論ではあるが

コロンとセミコロンを尊重すれば

To be, or not to beを「生」と「死」とした場合

前者は

**生きるか死ぬか　そのような二者択一は問題**だ

*他に方法はないのか？*

後者は

**生きるか死ぬか　どれもこれも問題だ**

*両方とも（に）問題だ*

と解釈したいのだが。

役者が　このニュアンスを声で演ずるのは

至難のわざであるが　観客は

自己流に解釈すればよいのであって

これが　人間による作品のオモシロさであろう。

秋山勇造の指摘で　明治になり　藤村の「春」で

ハムレットに心酔する北村透谷の名があり

この著作を調べる。

「春」は　仲間内のやり取りを記述した

ちんたらちんたらと　読むほどに退屈させる

彼等の間だけで通じそうな内輪話の羅列で

文学作品と言うより文芸作品。

否、綴り方教室で

この歳になり、島崎藤村の再評価となる。

以下は　読後感想ではあるが

明治改元とともに

演劇「ハムレット」はバージョンアップを重ね

前述の　北村透谷も心酔したように

明治初期　学徒や作家志望者も

崇拝していた西洋人達の　余りにも血なまぐさく

余りにも激しい　自己主張の描写に圧倒された彼らに

多くの自然主義作家の誕生を促したのでは？

しかも　彼等「高等遊民」は　物足らない日本語より

原文の英語を暗記・暗唱して　自らの高等さを示し

それなりに知的レベルの高い好奇心で高揚した。

ただ、当時の文学志望の彼等や彼女達は

殖産興業の時流から背を向けて

結果的には

読者を意識しすぎた「接客」手法に手を染めて

狭い国内での名声の割には

世界に冠たる文学を創造・創作できなかった。

しかし　小生には　最近のやり方のように

執拗に　日本や日本人を貶める趣味はない。

世界の十大小説と言っても　英語・仏語・露語限定で

力作かも知れないが　秀作はなく

たとえ　日本作品が注目されても

結果論ではあるが　日本語では不利であり

独逸語でさえ　不利であった。

ハムレット演劇の現状は　どのようなものだろうか？

これまでも今も　無観客と思われるが。